



Title	『西遊見聞』に見える外国地名および人名の漢字表記について : 日本式表記との関連性を中心に
Author(s)	李, 漢燮
Citation	語文. 2001, 75-76, p. 67-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68978
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『西遊見聞』に見える外国地名および人名の漢字表記について

——日本式表記との関連性を中心に——

一、はじめに

本稿は、兪吉濬の『西遊見聞』に見える外国地名および人名の漢字表記について調査し、またこれらと日本の地名や人名表記との関連について調べたものである。筆者は最近、『西遊見聞』の語彙索引を作った（『西遊見聞』索引、博而精、二〇〇〇年五月、ソウル）。

ここでは今回作った語彙索引をもとにして、『西遊見聞』に見える地名・人名表記について詳しく見てみたいと思う。

筆者はこれまで近代日本語の語彙が韓国語の語彙に及ぼした影響について調べてきた⁽¹⁾。本稿はこれまでの研究の続きで、日本の外国地名や人名表記が韓国語にどのように影響したかを調べようとするものである。今回調べた『西遊見聞』⁽²⁾は、韓国人最初の日本留学生であった兪吉濬が編纂した啓蒙書で、一八九五年東京の交詢社から出版された。『西遊見聞』は日本やアメリカに留学経験のある兪吉濬が西洋の地理、文明などを紹介した書で、西洋の地名と人名に関する表記がたくさん出ており、一九世紀末の韓国の外国地名および人名の表記を理解する上で重要な資料である。また、この書には外国の人名、地名表記のなかで中国式表記と共に日本式表記が数多く使

李 漢 燮

用されており、韓国における日本式表記の流入問題を考える上でも貴重な資料である。特に『西遊見聞』の内容七六項目のうち、二六項目は兪吉濬の日本留学時代の師匠であった福沢諭吉の『西洋事情』を翻訳したもので⁽³⁾、この部分の日本式地名と人名の表記を兪吉濬がどのように処理したのか、興味がそえられる部分とも言える。

一九世紀末以降、韓国語の語彙の成立に日本語と関連のあるものが少なくない。近代文明と関連した語彙はかなりの数が日本語との関連があり、外国の地名と人名表記も例外ではない。筆者は本稿を通してこれらの問題の一部を明らかにしようと思う。

二、韓国・中国・日本の外国地名表記法について

ここでは本題に入る前に、まず韓国や日本・中国における外国地名の表記法について、筆者の見解を若干触れることにする。

地名とは本来、人間活動に関連した土地の名前を表すもので、具体的には次のように下位分類できる⁽⁴⁾。

- 一、国家名・地方および行政区、州、道、県、郡、市など
- 二、自然地名・山地、山、平野、半島、岬、諸島、海洋、湖、河川など

三、集落地名…都市、村落、繁華街など

四、交通経済地名…道路、峠、運河、工業地帯など

五、観光地名…公園、観光行楽地など

六、歴史地名…古称、歴史的地名など

上に取りあげたものの中で、主に本稿と関連のある部分は国家名と自然地名、集落地名で、これらは地名表記の主要部分を成すものである。

『西遊見聞』に見られる地名表記を理解するためにはまず、韓・中・日三国の地名表記との相互関連性について調べる必要がある。

よつてここでは、韓・中・日三国の外国地名表記の由来について簡単に考察してみることにする。

まず中国の外国地名表記について見てみると、中国の外国地名表記は中国が外国と接するようになった歴史と関連がある。中国が世界に接するようになったのはマテオリツチ（利瑪竇）が中国に来る前と、マテオリツチが『坤輿万国全図』（一六〇二年）を通じて世界の地名を紹介した時期、マテオリツチの死後（一六一〇年）に分けて考えることができる。マテオリツチ以前の中国における外国に対する理解はアジアが中心で、したがって外国地名に対する表記も主にアジア大陸がその対象となっていた。表記方法は仏經の翻訳と『史記』などの歴史書から見られるように、漢字で音訳または意識する方法が使われており、たとえばインドを「天竺」、「印度」（仏經）と記し、ペルシャを「波斯」と記すこと（『梁書』と『周書』、『魏書』）がそれである。マテオリツチが中国に来て、『坤輿万国全図』を作ったのは一六〇二年で、これにより地球全体の姿が中国に知れ渡るようになった。この『坤輿万国全図』はアラビアを「曷刺比亜」、アフ

リカを「利未亜」、アメリカを「亜墨利加」、フランスを「仏郎察」、イギリスを「諸厄利亜」、ブラジルを「伯西尼」、メキシコを「墨是可」と記している。『坤輿万国全図』は韓国と日本にも伝わり、これらの国に西洋を紹介する上で大きな役割を果たし、これと同時にこれらの国に新たな地名表記方法を伝えている。マテオリツチの死後、後世に影響を及ぼした地名表記資料としては南懷仁の『坤輿全図』（一八〇二）と魏源の『海国図誌』（一八四七）、徐繼畲の『瀛環志略』（一八四八）などもあるが、これらの中でも特に『海国図誌』と『瀛環志略』は日韓両国に伝わり、西洋の地理と思想を紹介する上で大きく寄与した。中国の外国地名の表記方法は全て漢字で表記され、大部分は「曷刺比亜」、「仏郎察」、「亜墨利加」などから見るように音訳法が使われたが、一部は「天竺」、「合衆国」のように意識法が使われる場合もあった。

日本の外国地名および人名表記は、使用文字の上で二種類に分けて考えることができる。一つは漢字で表記する方法であり、明治末期までがこれに当たる。明治期まではおおかた中国の表記に従って、漢字表記する場合が多かった。例えば「印度」、「諸厄利亜」、「歐羅巴」などがそれにあたる。もう一つは「かな」での表記方法である。日本は中国と違い漢字以外に「かな」文字があるために、人名や地名を「かな」で表記することが可能である。「かな」を使って西洋人名や地名を表記するようになったのは一五世紀以後、ポルトガル、イギリス、スペイン、ネパールなど、西洋諸国と直接交流するようになって以来の事である。一七〇八年ローマ教皇庁宣教師ジョバンニ・バッティスタ・シドッティ（Giovanni Battista Sidotti）は、九州に潜入し布教活動をする間に逮捕された。彼は直ちに江戸へ押送さ

れ、政治家であり学者でもあった新井白石の審問を受けるようになる。新井白石は後日、審問結果をもとに『西洋紀聞』（二七一―二七五）を書くのであるが、この書の中で新井白石は外国の人名や地名を「カタカナ」を使って表記している。

其人答て、我名は、ヨワン バッティスタ シローテ、ローマン、
バライルモ人也

江戸時代以後「かな」で外国の人名と地名を表記する方法には、「とる」(Turkey 寛政九巳年風説書)、「婦らん春」(France 寛政九巳年風説書)で見られるように「ひらがな」を使用することがあったが、この表記法は一般的ではなく明治以後はカタカナを使うことが多くなった。

日本における外国地名や人名の漢字表記においては、最初仏經などの影響が多かったが、『坤輿万国全図』や『海国図誌』が入ってからこれらに倣うことが多くなったと考えられる。ところが日本が西洋と本格的に接触するようになった一八六〇年代末からは、外国地名表記にいろいろな問題が現れるようになった。その一つは『坤輿万国全図』や『海国図誌』にない地名や人名をどうするかの問題であり、もう一つは、中国式表記は中国音をもとにしていることから、日本人には分かりにくいという問題であった。そこで日本では日本独自の漢字表記を考案したのであり、その代表的なものが福沢諭吉の『世界国尽』である。『世界国尽』には二三二の地名のうち、一四〇が福沢独自のものである。例をあげると「アラビア」を「荒火屋」、「シベリア」を「志辺里屋」、「ロンドン」を「論頓」と表記するのがこれである。以降、日本では外国の地名と人名を表記するのに日本独自の表記を考案することが多くなり、このように新

しく作られた日本式の外国地名や人名が韓国語に入るようになったのである。

一方、韓国の外国地名表記は日本と同様に漢訳仏典以来、中国の影響を受けており、『坤輿万国全図』や『海国図誌』以後も中国の表記をそのまま使うことが多かった。一九世紀末以降は、日本式の漢字表記が入り中国式と共に使用されるようになり、一部は韓国式表記が考案され使用されたりもした。しかし一九一〇年からは日本の植民支配が始まり、日本語が「国語」となるに伴ってほとんどすべての外国地名が日本式に変えられるようになったのである。使用する文字においては、開化期以前（大体一八七六年以前）にはほとんどが漢字表記されていたが、開化期以後は「ハングル」表記が併用され、一九四五年以後は「欧羅巴」、「印度」、「濠洲」など一部を除いて「ハングル」表記に変わった。

以上日本と韓国の外国地名の表記について見てきたが、『西遊見聞』ではこれらをどういうふうに表記したかをこれから見ることにする。

三、『西遊見聞』の外国地名および人名表記

三・一、『西遊見聞』の内容

『西遊見聞』は、韓国最初の日本への留学生であり、アメリカへの留学生でもあった兪吉濟が西洋文明を紹介する目的として一八九五年に出版された啓蒙書であり、全二〇編から構成されている。『西遊見聞』は西洋の文明を紹介する中で、西洋の思想や制度、文明などの聞き慣れない用語を韓国語に書き記しており、韓国近代語彙の成立問題を考える上で大変重要な資料として知られている。この書

の内容を理解するため、全二〇編の目次を日本語に訳すと次の通りである。

- 第一編 地球世界の概論、六大洲の区域、邦国の区別、世界の山
- 第二編 世界の海、世界の江河、世界の湖、世界の人種、世界の物産
- 第三編 邦国の権利、人民の教育
- 第四編 人民の権利、人世の競争
- 第五編 政府の始初、政府の種類、政府の治制
- 第六編 政府の職分
- 第七編 収税法規、人民納税の分義
- 第八編 政府の民税費用の事務、国債
- 第九編 教育制度、養兵制度
- 第一〇編 貨幣大本、法律公道、巡察規制
- 第一一編 偏党気習、生涯を求める方道、養生規制
- 第一二編 愛国忠誠、孩嬰撫育の規模
- 第一三編 泰西學術の來歴、泰西軍制の來歴、泰西宗教の來歴、学業条目
- 第一四編 商賈の大道、開化の等級
- 第一五編 婚礼の始末、葬事の礼節、朋友相交道理、子女待接の礼貌
- 第一六編 衣服飲食及び宮室の制度、農作及び牧畜の景況、遊樂の景像
- 第一七編 貧院、病院、痴兒院、狂人院、盲人院、啞人院、教導院、博覧會、博物館及び博物院、書籍庫、演說會、新

聞紙

第一八編 蒸氣機關、蒸氣車、電信機、遠語機、商賈の会社、城市の排鋪

第一九編 各国大都會の景像、合衆國の大都會、英吉利の大都會

第二〇編 仏蘭西の諸大都會、日耳曼諸大都會、荷蘭の諸大都會、葡萄牙の諸大都會、西班牙の諸大都會、白耳義の諸大都會

都會

上記の二〇編のうち外国の地名が多く見られる部分は、第一編、

第二編の世界地理紹介部分と、第一九編、第二〇編の西洋の国別の大都市部分であり、人名は第一三編「泰西學術の來歴」と第一八編の西洋科学文明の発明が紹介される部分に集中している。外国地名および人名表記は、全般的に漢字だけを表記したものが多く、一部は「ハングル」表記が併記されている。

三・二、『西遊見聞』の地名表記

『西遊見聞』に見える地名は、大陸名と海洋名、国名、自然地名、地域名および都市名などに分けて考えることができる。これらの中で大陸名と海洋名、国名に限っては、大方「ハングル」表記と漢字が併記されており、場合によっては略称も見られる。『西遊見聞』に見られる外国地名の全体像を理解するため項目別に整理してみると次の通りになる。

〈大陸名〉…大陸を〈洲〉で表示し、六大陸全体は、六大洲(13+10)と示してある。この六大洲の略称は六洲(20+11)である。括弧内の数字は用例の出現頁を表し、出現頁は紙面の関係上、一つのみあげることにする。

亜細亞洲(13・2など) 略称は亞洲(18・7など)

歐羅巴洲(12・1など) 略称は歐洲(13・6など)

阿美利加洲(13・4など) 略称は北美洲(42・9など)

南阿美利加洲(14・12など) 略称は南美洲(42・9)

南北アメリカ州の合称は、南北阿美利加洲(19・8など) 北南阿美利加洲(46・10など) 阿美利加洲(12・6) これらの略称は南北北美洲(20・2)、

美洲(序文 3・11)

阿弗利加洲(12・5など)

大洋洲(14・11など) 大西洲(43・9)、南洋大洲(13・11)

〈五大洋〉…五大洋全体が見られるが、「インド洋」は今日とは違い、

「印度海」になっている。

北極海(41・5) 南極海(41・6) 大西洋(41・7) 太平洋(41・8) 印度海

(41・9)

〈国家名〉…八ヶヶ国の名前が漢字で表記されている。カンボジアと

中国は二種類の表記があり、一部は当時まだ独立していない国も含

まれている。

アジア州…一九ヶ国

甘保杜野(16・4) 甘保杜亜(33・9) 緬甸(15・11) 繁累釋斯坦(16・4)

西藏(16・2) 暹羅(15・10) 世界野(16・9) 新嘉坡(Singapore) 16・4

阿富汗(30・8) 伊蘭(Tran) 24・4 印度(15・13) 日本(15・8) 清国

(支那) 15・7 土基斯坦(Turkestan) 16・4 巴札斯坦(16・9) 波斯

(16・3) 華立彬(Philippine) 46・1)

ヨーロッパ州…計二五ヶ国が出ており、英国とアイルランド、オランダの表記は複数である。

諾威(17・13) 樓蘭尼亞(18・4) 大不列顛(16・14) 大列顛(16・4) 英吉

利(11・7) 英国(10・3) 略称は英(48・13) 白耳義(17・7) 略称は白

(34・13) 普魯士(Prussia) 36・10) 略称は普(49・10) 宝妬尼亞(Bohnia

60・8) 仏蘭西(17・1) 略称は法(33・12) 仏(1・13) 山馬利路(17・8)

西班牙(17・14) 西比亞(18・6) 瑞西(17・12) 瑞典(18・3) 俄羅斯(16・

10) 安道羅(17・10) 愛爾蘭(島) (516・1) 阿爾蘭(島) (124・7) 澳地利

(17・3) 伊太利(10・2) 日耳曼(17・2) 丁抹(17・9) 土耳其(16・8)

葡萄牙(12・1) 略称は葡萄(26・12) 荷蘭(17・6) 和蘭(1・6) 懸蘭

(Finland) 60・8) 匈牙利(17・4) 希臘(18・2)

アフリカ州…計一四ヶ国が出ています。

羅伊比賴亞(18・14) 馬哥塞(19・2) 調支累亞(19・6) 埃及(18・9) 烏

滿(19・3) 貴尼(Guinea) 45・7) 摩洛哥(18・10) 模潜伯(Mozambique

19・7) 冒潜伯(45・11) 阿排時尼亞(18・12) 蘇丹(19・5) 土蘭斯拔(

19・1) 杜立八利(18・13) 杜尼斯(18・11) 屏支排(19・4)

アメリカ州…南北アメリカ全体で二三ヶ国が登場しているが、アメ

リカにおいては合衆国、花旗国、北美合衆国、阿美利加など四通り

の表記が見られる。

住那多(21・1) 哥倫比(20・3) 斯太樓哥(20・5) 高斯太樓加(147・5)

瓜多磨羅(19・12) 貴札那(Guiana) 37・7) 貴崖那(21・2) 越排島

(Cuba) 21・3) 墨西哥(19・11) 麦時古(19・11) 拔利比亞(20・8) 秘魯

(20・7) 彬崖朱越那(20・4) 山道明澳(20・13) 聖撒排那(80・9) 亞然

丁(20・10) 厄瓜多(20・6) 猶羅費(20・11) 尼可羅費(80・11) 智利(20・

9) 把羅費(20・14) 波羅馬(Panama) 14・1) 巴西(20・2) 合衆国(3

・9) 花旗国(3・9) 北美合衆国(38・4) 阿美利加(38・9) 許太伊(20

・12) 混斗羅斯(19・13)

大洋洲(オセアニア州)…まだ独立国ではなかった二つのイギリス殖

民地を紹介されている。

大洋洲(Australia) 31・3) 樓質蘭(Newzealand) 136・1)

〈地域、行政区域名〉…西洋の行政区域名として「府」が一四例、「州」が一二例、「郡」が二例見える。東洋の例としては、「滿洲」一つの

みが出ている。

府：哥多瓦府(51-6) 屈羅秀古府(46-9) 紐約府(49-10) 羅馬府(31-12) 来丁府(54-13) 圖墩府(49-10) 馬細逸府(33-6) 滿棟秀太府(31-6) 癸太毛府(49-5) 細勃府(32-7) 巖秀撫淡府(54-14) 約紐府(32-4) 巴黎府(32-11) 巴里府(32-2)

州：葛尼布尼亞州(12-11) 敬札斯太州(57-4) 紐約州(61-5) 蘭桂沙州(35-13) 麻咸沙州(33-10) 磨沙州序文3-9 磨沙朱細周州(49-2) 敏札昭太州(61-5) 富祿吉仁州(43-8) 北哥兀利那州(33-11) 檳細州(43-9) 布魯漢秀州(33-7) 布哇(21-9)

郡：南方州郡(47-14) 瞿仁利聚郡(35-8)

〔自然地名〕：自然地名は郡、城、火山、江、公園、橋、島、禮拜堂、半島、海邊、山、河、海、湖などが見られる。これらを整理してみると、次のようになる。

城：多仏仁城(33-1)

火山：葛郎剛火山(10-13) 高濟貴那火山(10-12) 比秀比亞火山(10-2) 秀厚頼火山(10-11)

江：葛南比亞江(57-9) 葛老羅道江(57-8) 甘保杜亞江(55-12) 甘比亞江(56-13) 高馬茶江(49-14) 骨札磨江(55-14) 那逸江(56-9) 那八那他江(58-4) 尼楷江(56-11) 帶奈江(56-2) 大掛江(26-2) 敦江(56-7) 東江(49-9) 洞久斯哥江(60-4) 斗羅河江(56-9) 杜衛那江(56-8) 羅仁江(26-5) 札那江(55-14) 札斗江(57-6) 札斯太江(56-7) 札乙遜江(57-2) 札巴江(56-7) 老温江(56-5) 累伊斯江(57-3) 利恪奈老江(58-3) 利伊斯江(50-4) 馬大羅江(58-3) 馬頼江(58-6) 幕連札那江(57-13) 麥堅支江(57-7) 帽鶴江(57-7) 美時什被江(57-4) 美朱里江(57-6) 拔家江(49-10) 非秀出那江(56-2) 沙秀哥 治元江(57-1) 珊瑚阿緊江(57-8) 山厚安江(61-9) 索厓札江(57-3) 瑞江(49-10) 瑞華江(49-14) 石太面土江(57-8) 先厓傑江(56-13) 聖老連秀江(57-2) 秀太干江(57-10) 蕪布孫江(57-9) 阿干沙秀江(57-6) 阿奈巴羅江(55-14) 愛撫江(49-10) 楊子江(24-12) 菸

羅臥多江(55-12) 熬道江(26-6) 遨道江(56-2) 五蘭枝江(56-12) 五利老高江(57-12) 澳排江(36-1) 邀他華江(57-3) 澳賀澆江(57-6) 峴瑞江(56-3) 愚銀謁奈江(58-3) 元厓勢伊江(56-1) 裕昆江(57-9) 幽布札朱江(55-13) 聿謁江(49-10) 乙富江(56-3) 仁多秀江(55-12) 逸尼江(49-11) 潛排支江(56-13) 中央羅仁江(28-7) 陀林江(49-11) 陀逸江(23-9) 陀婆祖寿江(58-3) 土哥親江(58-4) 特階江(50-1) 巴他江(58-4) 蒲江(28-8) 56-5) 布札字江(57-9) 賀春江(33-13) 咸拔土江(50-4) 歌滿道江(49-11) 黑竜江(24-12)

公園：昆高道公園(38-8) 札八軟土公園(34-8) 賴伝土公園(34-6) 宣点秀公園(34-4) 佑杜蘭公園(36-4) 中央公園(46-2) 被道素文公園(32-2) 画野滿公園(30-3) 華爾士公園(31-14) 戲屋公園(34-11)

橋：圖墩橋(31-1) 西美尼秀多橋(32-12)

島：彌麟蘭島(42-6) 大東洋島(46-10) 越排島(21-3) 馬哥塞島(64-10) 滿巴丹島(43-8) 蘇格蘭島(28-2) 詩美礼島(27-9) 阿爾蘭島(12-7) 愛爾蘭島(33-2)

禮拜堂：老脫羅南禮拜堂(33-3) 聖八秀礼拜堂(33-11) 聖彼得礼拜堂(33-12) 狎环礼拜堂(34-1)

半島：蔑頼半島(64-10) 葉厓頼多半島(47-6) 伊太利半島(26-1)

海邊：愛斗利庫特海邊(26-2) 全邀阿海邊(27-8) 太平洋海邊(50-2) 賀春海邊(61-3)

山：哥斯凡利杜山(32-9) 哥蔽治安山(27-2) 巨利斯脱山(29-12) 巨馬輪山(29-12) 鉅於朱山(24-9) 崑輪山(22-2) 越越蘭山(49-9) 威山(23-11) 斗頼昆山(56-12) 礼保茶山(31-6) 綠雞山(57-1) 文那山(31-6) 拔諫山(27-5) 拔礼伊山(49-7) 宝樹支山(28-7) 北邛山(39-10) 弗萊求山(33-11) 彬茶山(24-9) 彬茶寿山(27-5) 西埃乙布山(27-7) 率老滿山(24-4) 時於羅礼排多山(27-12) 時於羅礼保多山(33-3) 時於羅馬斗頼山(32-14) 巖撈翅山(31-8) 阿片仁山(12-9) 安道秀山(37-12) 謁太伊山(49-9) 謁蔽仁秀山(28-8) 愛突羅斯山(30-1) 愛斗老山(57-7) 埃乙布山(26-4) 龔富樓朱山(24-4) 五臨

坡秀山上(30-2) 臥沙聚山(33-4) 楮瞿壽山(24-4) 楮羅秀山(24-6) 土蘭世比尼亞山(27-2) 渾杜瞿叟山(24-2) 華爾士山(33-10) 喜馬拉山(24-14、63-1)

河：斗羅河(56-9) 林布蒲河(56-14) 馬細河(55-13、56-6) 磨仁岸河(50-7) 美時什被河(34-5) 伯昆河(57-7) 富樓壽河(58-3) 沙溫河(53-7) 西支河(40-2) 細茵河(55-4) 蘇西連河(13-9) 秀布札河(53-1) 愛馬尊河(57-14) 兀連斯古河(55-14) 字樓鉅河(58-4) 乙保老河(56-5) 乙富河(53-9) 仁斗巨羅河(55-14) 鵲鳩河(57-8) 智富

羅河(58-3) 徵久河(58-4) 察壽河(53-7) 探秀河(50-9) 片旒河(56-12) 蔽古河(56-8) 布士幕河(40-10) 浩道遜河(43-9) 黃河(24-12)

海：哥秀比安海(24-10) 貴尼海(56-12) 南極海(41-6) 美時那海(27-8) 拔特海(56-3) 排仍海(13-12) 北極海(24-11) 寿便瑞海(60-1) 愛斗利崖特海邊(26-2) 愛調海(49-10) 五海(41-10) 援特海(60-8) 印度海(41-9) 日耳曼海(56-3) 地中海(30-1) 紅海(43-4) 黑海(56-7)

湖：哥茶湖(60-13) 哥美湖(59-8) 哥秀比安湖(63-4) 雞魚那湖(60-1) 昆秀大斯湖(60-12) 那渡家湖(60-9) 丹家尼哥湖(61-2) 台特阿哥湖(36-14) 大北湖(57-2) 大塩湖(59-10) 洞庭湖(60-5) 礼哥尼果湖(61-3) 礼滿湖(60-12) 馬那窠湖(61-3) 馬羅哥寶湖(61-10) 馬祖

類湖(60-13) 美時干湖(30-6) 拔家須湖(59-3) 排葛湖(60-4) 伯士利亞湖(56-10) 琵琶湖(60-6) 秀布利荪湖(57-3) 謁排土湖(61-1) 崖巫湖(60-1) 五大家湖(60-9) 五原湖(59-12) 温大利邀湖(61-6) 臥鉅湖(59-12) 完湖(60-7) 字樓眉湖(60-7) 元厓白湖(57-2) 乙富

湖(59-5) 乙巴斗湖(56-9) 揖布湖(49-11) 伊勢邀湖(60-13) 伊太斯哥湖(57-4) 朱益湖(60-12) 遮杜湖(49-14) 太大哥哥湖(59-13) 土蓮秀湖(60-1) 蔽利美杜湖(59-12) 休論湖(61-6)

〈都市名〉：東洋の都市はほとんど見られず、西洋の都市のみ見られる。これらを国別に整理してみると次のようになる。

アメリカ：馮那富馬(Alabama 33-8) 瓮大手(Baltimore 49-5) 宝樹墩(Boston 32-3) 富祿吉仁(Brooklyn 49-6) 池家阜(Chicago 30-5) 肇智冊(Georgia 33-9) 滿田丹(Mahattan 33-8) 磨沙朱細周州(Massachusetts 49-2) 略称は磨沙州) 敏礼昭太(Minnesota 61-5) 紐約(New York 33-7) 旗威沙旒(New Hampshire 33-10) 楮細(New Jersey 33-6) 北哥兀利那(North Carolina 33-11) 必那達彼亞(Philadelphia 33-2) 桑港(San Francisco 34-11) 山布蘭世斯古(33-2) 華盛敦(Washington 33-11)

イギリス：多仏仁(Dublin 32-12) 伊丹堡(Edinburgh 32-10) 屈羅秀古(Glasgow 46-9) 蘭桂沙(Lancashire 35-2) 立芬八(Liverpool 35-12) 蘭墩(London 40-14) 滿棟秀太(Manchester 37-9) 西美尼秀多(Westminster 30-12)

フランス：馬細途(Marseilles 33-9) 里昂(Lyon 33-9) 巴里(Paris 42-11) 巴黎(10-11) 布魯漢秀(Provence 33-7) 排沙游(Versailles 32-13)

ドイツ：柏林(Berlin 33-13) 厚蘭布士(Frankfurt 34-6) 威福(Hamburg 33-7) 汨論(Köln 33-12) 峴山見(München 34-7) オランダ：嚴秀據淡(Amsterdam 34-4) 赫久(Hague 34-13) 来丁(Leiden 34-14) 布朱淡(Potsdam 32-6) 祿據淡(Rotterdam 37-12) ポルトガル：利秀繁(Lisbon 12-1) 盤浦(Oporto 34-9) スペイン：哥杜朱(Cadiz 32-6) 哥多瓦(Cordova 30-12) 加拉拿太(Granada 31-1) 馬斗賴(Madrid 34-11) 細勃(Sevilla 31-5) 沙羅

高拉(Zaragoza 32-12) ヘルギ：安道岬(Antwerp 33-8) 富羅世(Brussels 33-9) イタリア：葛羅富利亞(Calabria 12-3) 穢捌(Napoli 27-8) 布嚴蔽阿伊(Pompei 10-14) 羅馬(Rome 28-2) 詩美礼(Sicilia 07-9) クリス：阿丹(Athens 27-13) 秀巴陀(Sparta 27-27) ヘル：葛那澳(Callo 11-14)

以上、「西遊見聞」に見られる地名表記の例を挙げてみた。これら

についてもう少し詳しく考察してみると、次のような特徴が見られる。

一つ目は、全ての地名が漢字で書かれたということである。当時、日本・中国・韓国などの漢字文化圏では外国の地名を表記するとき、漢字で書くのが一般的であり、『西遊見聞』でもこのような慣例に従っている。地名を漢字で書くということは、今の考え方から見ると「場合によってはおかしい感じもするが、当時韓国の習慣から見ると当然なことであった。」

二つ目は、地名の表記には中国の表記を受け入れたもの以外に兪吉濬自身が考案したものが多いが、中には日本から受け入れたものがあるということである。日本式の表記の導入問題については第四章で詳しく見ることにする。

三つ目は、漢字の当て方についてである。漢字文化圏で外国地名を表記するときは、音訳法と意訳法（例えばアメリカを「合衆国」「花旗国」と呼ぶなど）と訓訳法などが使われたが、『西遊見聞』には音訳法が多く使われたという点を挙げることができる。次の例を見てみる。

謁那富馬(Alabama 33-8) 屈羅秀古(Glasgow 46-9)

これらは全てアメリカ式英語発音に対応する韓国式音訳である。訓訳法は日本でよく使われた方法で、「アラビア」を「荒火屋」と書く方法である。これは韓国語では通用しない方法なので、『西遊見聞』には一件も出てこない。

最後は兪吉濬が使った音訳法についてである。兪吉濬は、『西遊見聞』で従来の資料に出てこない地名や都市名を音訳法を使って記している。兪吉濬は最初の日本留学生であり、アメリカ留学生でもあ

ったということは前述の通りであるが、兪吉濬はアメリカの留学生出身らしく、アメリカ式英語の発音で地名や都市名を書いている。次の例を見てみる。

富禄吉仁(Brooklyn 47-9) 那逸江(56-9) 多仁仁(Dublin 32-12)
秀陀陀(Sarta 267-13) 美時干湖(300-6)

上に示した方法は、原語の発音を韓国式に読んで、それぞれの音節に類似する音(韓国の字音)を持った漢字を当てていく方法である。例えば、アメリカの都市「Brooklyn」は、まず原語を「브로클린」のように韓国式に読んだ後、各音節の発音に類似した韓国漢字「富禄、吉、仁」をそれぞれ当てている。このような方法は英語と漢文両方とも分かる兪吉濬にとっては、十分可能な方法であったと思われる。

三・三、『西遊見聞』の人名表記

『西遊見聞』には西洋で見聞した事を記した啓蒙書のせいか、東洋人の名前は見当たらず、登場人物六七名全てが西洋人である。これらは西洋文明を発展させる上で貢献した王、政治家、思想家、教育者、科学者、発明家、学者などが大半を占め、特に科学者が多く出ているのが目につく。これらを全て挙げると、次のようになる。

肇智王(67-12) 宝利柔(186-8) 時高久秀(276-14) 謁厚礼度王(276-14)
拿破輪(288-12) 谷寿/氏(289-13) 耶蘇(289-11) 胡邁(289-3) 喜時邁
(289-3) 扁道(289-4) 秋時伊(289-4) 杜娛道(289-4) 弼婁台(289-4)
脱累秀(289-5) 皮宅高(289-5) 偈嗜頼(289-6) 阿利秀(289-61) 裴昆
(289-9) 麦那秀(330-4) 布蘭施(330-12) 裴坤徳(330-12) 哥道寿(330-12)
葛逸人邀(331-1) 婁富(331-2) 柳順(331-5) 威発妬(331-11) 惠賢
(331-12) 来伯(331-13) 赵比茹(331-14) 礼排頼(332-1) 阿頼高(332-2)

代排(332-3) 解密敦(332-4) 親達(332-6) 鶴瑟礼(332-7) 秀通瑞(332-8) 毛御秀(332-9) 何伊土(332-10) 察礼寿(333-5) 瑪華利(333-11) 高寿多厚(336-2) 厚礼突益(336-7) 馬賀遠(338-9) 朱寿(339-5) 布施敦(339-6) 愛抜論(339-7) 阿台美秀(339-7) 虚媚秀(339-9) 喜羅(339-11) 愛台那(339-11) 喜施野(339-12) 带美陀(339-12) 非那秀(339-13) 馬頼(340-11) 婁據(343-14) 礼邀発(465-4) 瓦妬(465-5) 魯彬遜(467-3) 哥大涅(467-8) 寿大渾(467-9) 俊敦(474-10) 謝施(478-14) 毛荪寿(479-2) 華盛敦/氏(490-1) 酌遜/氏(492-3) 顯利王(338-3) 路易王(338-3)

これら人名表記を考察してみると、ほとんどが原語の発音を韓国式に読んでそれぞれの音節に韓国の字音字を当てている。これらは日本式の表記とは関連がなく、兪吉濬自身が考察したものと思われる。

四、日本式表記との関連性

ここでは、『西遊見聞』に書かれた外国地名表記と日本式表記との関連性について考察してみることとする。

四・一、調査方法

『西遊見聞』に日本式の地名表記が受け入れられていたとすれば、『西遊見聞』が現れる前に日本ですでに該当する表記がなくてはならず、また調査を通してこのような点を確認しなくてはならない。このためには二つの方法を通じてこれを調査することにした。

まずは、『西洋事情』との関連性の調査である。兪吉濬は日本に留学中、『西洋事情』の著者である福沢諭吉の家で起居しながら福沢諭吉から直接指導を受けており、実際に、『西洋事情』を読んでいる。また、『西遊見聞』の二〇編の中、三、四、五、六、七、八、一三、

一七、一八編は、『西洋事情』の内容から一部または大部分を翻訳しており、この翻訳過程において、日本表記を受け入れた可能性があると見るためである。

もう一つの方法は、『西洋事情』以外の日本資料の調査である。兪吉濬は日本留学中に日本の開化書をたくさん読んでおり、のちに現実政治に関与した頃、日本方式に開化を推進しようとしたため、彼が残した著作物の中には日本式の用語と表記が多く見られる。このような日本語用語と表記は、主に彼が日本に滞在していたときに覚えたものであると考えられるため、他の日本資料の調査は必要不可欠である。今回調査した資料は次のようなものであるが、これらは主に兪吉濬が日本留学時に読んだと推定される開化書と辞書類、江戸時代の外国地名の表記資料、外国の地名表記を調査し整理した資料などである。

一、宛字外来語辞典編輯委員会(一九七九)、『宛字外来語辞典』、柏書房、一九七九・一一

二、遠藤好英(一九八八)、『外来語漢字一覧』、『漢字講座九 近代文学と漢字』(佐藤喜代治編)、明治書院、一九八八・六

三、新井白石の『和蘭風説書』、『西洋紀聞』

四、福沢諭吉の『西洋事情』、『世界国尽』、『学問のすすめ』、『文論の概略』

五、『西国立志編』

六、『附音挿図 英和字彙』(柴田・子安編、一八七三)、『和英語林集成』(Heburn 編、一八六九)

そのほかに本稿では日本表記と中国表記の関連性を考察するために、Lobscheidの『英華字典』(一八六六-一八六九、香港)と、坤輿

万国全図』なども調査した。

四・二、調査結果

四・二・一、『西洋事情』の翻訳部分にあらわれる表記

先に述べたように、『西遊見聞』の内容の中には『西洋事情』の特定部分を一部または全部分翻訳しているが、調査の結果この部分は本来外国地名と人名表記の出現が比較的少ない部分であり、調査対象語は多くなかった。二つの資料に見られる地名表記が一致するかどうかはパソコンに入力したファイルを検索する方法で進めた。『西洋事情』の該当部分の中、外国地名・人名表記のうち漢字で表記されたものを全て挙げると次の通りである。

欧羅巴 拿破輪 魯西亞 普魯士 仏蘭西 西班牙 瑞典 蘇格蘭 亜米利加
亜米利加合衆国 英国 英吉利 竜動 巴黎府 巴理斯 葡萄牙 彼得堡 荷
蘭 合衆国 華盛頓

これら二〇例の内、一五例は『西遊見聞』のそれと一致し、魯西亞と普魯士、竜動（イギリスの首都、ロンドン）、巴理斯（フランスの首都、パリのアメリカ式発音）、華盛頓（アメリカの首都）など五例だけは『西洋事情』の表記と一致しない。これを見ると、俞吉濬は『西洋事情』を翻訳しながら日本の外国地名・人名表記を参考にしていたということがうかがえる。

四・二・二、『西洋事情』以外の資料との関連性

『西洋事情』以外の資料についての調査は、福沢諭吉の他の著作物と当時出版された開化書を中心に調べ、江戸時代以前の資料も考察の対象とした。その結果、『西遊見聞』に見られる地名・人名表記の内、日本資料にすでにあらわれたものは次の通り九四例である。

〈大陸名〉 亜細亞洲（略称 亞洲） 歐羅巴洲（略称 歐洲） 北阿美利加洲 南

阿美利加洲 美洲阿弗利加洲 大洋洲（天西洲）

〈五大洋名〉 北極海 南極海 大西洋 太平洋 印度海

〈国家名〉

アジア州・緬甸 西藏 暹羅 新嘉坡 阿富汗 安南 禮八 猶太 伊蘭 印度

日本 巴札斯坦 波斯

ヨーロッパ州・諾威 大不列顛 英吉利 英国（略称は 英） 白耳義 普魯士

（略称は 普） 宝妬尼亞 仏蘭西（仏） 山馬利路 西班牙 西北亞 瑞西瑞

典 俄羅斯 安道羅 愛爾蘭（島） 爾蘭（島） 奧地利 伊太利 日耳曼 丁抹

土耳其 葡萄牙 荷蘭 和蘭 匈牙利 希臘

アフリカ州・埃及 蘇丹 杜立八利 杜尼斯

アメリカ州・墨西哥 秘魯 亞然丁 尼可羅果 智利 巴西 合衆国 花旗国

北美合衆国 阿美利加

オセアニア州・大洋洲 樓質蘭

〈地域、行政区域名〉 紐約府 羅馬府 圖墩府 巴里府 巴黎府 紐約州 布

哇

〈自然地名〉 楊子江 黑竜江 蘇格蘭島 愛爾蘭島 伊太利半島 太平洋海

邊 黄河 哥秀比安海 地中海 紅海 黑海

〈都市名〉 紐約 桑港 華盛敦 圖墩 巴里 伯林 羅馬

〈人名〉 拿破輪 耶穌 華盛敦

これらの調査結果を「阿美利加」と「和蘭、荷蘭」の例を挙げて説明してみることにする。

今日、美国として呼ばれる国に対して、『西遊見聞』では「阿美利加、合衆国、花旗国、北美合衆国」など四通りの表記があらわれており、これらの日本資料で使われた記録は次のようである。

阿美利加・亜墨利加（増補華夷通商考、一七〇九）、采覽異言（一

九一三、万国公法(一八六八)

亜米利加(窮理通、一八三六)

美利加(横浜新聞もしほ草、一八六八)

亜美利加(万国公法 開成所翻譯版、一八六六)

合衆国・地字正宗(一八四七)、アメリカ合衆国(特命全權大使米

歐回覽実記、一八六〇)

花旗国・花旗国(特命全權大使米歐回覽実記、一八六〇)

北美合衆国・合衆国(特命全權大使米歐回覽実記、一八六〇)

上の例を見ると、アメリカに対して四通りの呼び名は日本で既に一八世紀から使われていたということがわかる。

次に「オランダ」についての表記である。日本とオランダとは一七世紀以降、交流が始まり、鎖国政策をとる中でも、唯一交流をした西洋の国でもある。こういう事情からオランダは日本資料に一八世紀初から「和蘭、阿蘭、阿蘭陀、荷蘭、蝸蘭、紅毛、オランダ」という名前で出現し、『西遊見聞』に見られる和蘭と荷蘭は次の資料に見られる。

和蘭・西洋紀聞(一七〇八)、世界国尽(一八七九)

荷蘭・特命全權大使米歐回覽実記(一八六〇)

上の記録を見ると、「和蘭」と「荷蘭」は『西遊見聞』以前に日本で使われていた表記であると思われることができる。

ここで一つ確認しておきたいことは、中国の地名表記である。上のリストには緬甸、西藏、暹羅、新嘉坡、阿富汗、安南、禮八、猶太、蘭伊、印度、波斯、楊子江、黒竜江、地中海、紅海、黒海、桑港、華盛敦など、中国で古くから表記してきた外国地名(主にアジアの地名)と中国内の地名が含まれている。これらにはやくから中国で

使用されたもので、日本に紹介され通用された中国起源の表記として見るべきであろう。しかし、本稿では各表記の起源問題を論ずることが目的ではないため、日本資料に使用されたものに限定した。地名表記の起源問題はまた別の機会に譲りたい。

四・二・三、兪吉濬自身が考案した表記

次は兪吉濬自身が考案した表記についてである。まず、「華立彬」と「埃乙布山」の場合を見てみることにする。フィリピン(Philippine)を意味する「華立彬」は今回調査した日本資料には見られず、次の例に見られるように「呂宋」「比利皮那」「比律賓」「比立」などが日本で作られている。

呂宋・海外人物輯(一八五四)

比利皮那・外国情書(一八三九)

比律賓・特命全權大使米歐回覽実記(一八六〇)、新選万国地図

(一八九五)

比立・特命全權大使米歐回覽実記(一八六〇)

Philippine の日本式発音はフィリピンで、「比」が日本発音「比」(フイ)に近い。ところが「華」は日本音で「hwa」「hoch」となり、日本式発音では合わず、日本語では Philippine を表記するには適しない。それでは『西遊見聞』の「華立彬」はどこから来たものであろうか。筆者はこれが兪吉濬自身が考案した表記と考えている。「華立彬」は Philippine を韓国式に読んで韓国語の字音で当てた表記であるからである。

最後に「埃乙布山」について見てみることにする。「埃乙布山」はスイスにある山、アルプス(Alps)を指すもので、今回調査した資料には見られなかった。「埃」の日本の漢字音は「アイ」(エ)で、ア

ルプス山を表記するには適していない。また、『西遊見聞』以前の中國資料を見ても、「埃乙布」は見られない。Loosheidの『英華字典』(二八六)には

Alps 崇山 mountains in southern Europe

とある。また、問題は「乙」にある。「乙」は中国や日本で音借をする時使わず、韓国の吏読表記で「乙」を表記するときよく使う字である(例: 乙、石乙、夏)。このようなことを見ると、「埃乙布山」の「埃乙」は韓国発音「알」または「애」を表記したもので、間違ひなく兪吉濬自身の表記のように思われる。

『西遊見聞』には地名表記四三三例、人名表記六七例、計五〇一例が見られるが、この中で日本資料と一致するものは上で見たように、地名表記九六例(全体の一九・〇%)と人名表記三例(全体の四・五%)である。この結果から兪吉濬は『西遊見聞』を編纂した時、外国人名と地名表記において日本の表記を参考にしたと考えられる。

それでは兪吉濬はどのような場合に日本式表記を導入し、どのような場合に自ら考案した表記を使用したのであろうか。この点について筆者の見解は次の通りである。導入された日本式表記を見ると、共通点として日本で語形が固定されたものが多く、また発音上、韓国人に抵抗感が少ないものが多い。またもう一つの特徴は中国起源の表記が多いという点である。先にも述べたように、日本式の外国地名のうち、漢字表記語は中国に起源を有するものが多く、中国資料を読むことができた兪吉濬にこれらの表記を導入することは抵抗感が少なかったことが考えられる。一方、兪吉濬自ら考案した表記は当時、啓蒙書的な性格を帯びた地理書にほとんどあらわれない。

当時の啓蒙書は六大陸や五大洋、国家名などを説明したものが大部分であった。『西遊見聞』の内容は、日本留学とアメリカ留学で見聞きたことと、ヨーロッパ旅行を通して自ら会得したものが主であるが、その当時は、西洋の人名や地名まで詳しく示す書はなかったことであろう。また重要な理由の一つとしては、日本式表記が韓国発音にぴったり合わないという点である。例を挙げると、フィリピンの場合の「比利皮那」「比律賓」「比立」は、韓国発音で「미리핀」, 「미울빈」, 「미립」になり原発音とかなりの違いがあらわれ、これは、アメリカまで留学した兪吉濬にとっては受け入れることが難しかったと思われる。

五、ま と め

以上、『西遊見聞』に兪吉濬が導入した日本式の地名・人名表記について考察してみた。調査結果、兪吉濬は『西遊見聞』を執筆しながら外国の人名と地名の約二割程度を日本語から受け入れたということが確認された。筆者は、一九八五年に発表した論文で、『西遊見聞』に二九〇余りの日本の漢語が受け入れられたということを明らかにしたが、これらの一般語彙とともに地名や人名も日本式の表記を導入したということが確認された。

今後の課題としては、これらの日本式の地名・人名表記と中国資料との関連性を調査することを考えている。外国地名の漢字表記は本来中国で始まり、韓国と日本に伝えられたものが多い。また本来の起源を問い詰めてみると、中国式表記ではあるが中国では一般化せず日本で一般化したもの、たまたま語形が一致するものなど、とても複雑である。これらの問題を明らかにするためには、韓国・中

国・日本の三国の用例を収集し、綿密に検討する必要がある、これについての検討はこれからの課題とすることにする。

注

(1) これらの研究には次のようなものがある。

- 李漢燮(一九八四)、現代韓国語に入っている日本語——日本で一部または全部が訓読される語を中心に、語文 四四、大阪大学国文学研究室、一九八四・一一、一五—二六
- 李漢燮(一九八五)、『西遊見聞』の漢字語について——日本から入った語を中心に——国語学 一四一、国語学会、一九八五・六、三九五〇
- 李漢燮(一九八八)、朴泳孝の建白書に現れる日本語について、国語学叢史の研究 一七、国語学叢史研究会、一九九八・一〇、三六八—三四八
- (2) 『西遊見聞』の成立および内容などについては次の文献に詳しい説明がある。
- 金泰俊(一九七四)、『西遊見聞』西洋事情、読書新聞 一九七四年一月二七日付
- 柳永益(一九九〇)、『西遊見聞』論、韓国史市民講座 第七輯、一潮閣
- 李光麟(一九七九)、兪吉潁の改化思想、韓国改化思想研究、一潮閣
- 任展慧(一九九四)、日本における朝鮮人の文学と歴史、法政大学出版局
- (3) これについては、任展慧(一九九四)の、『日本における朝鮮人の文学と歴史』四五頁に詳しい調査がある。
- (4) 『世界地名大辞典』(一九七三、渡邊光編、朝倉書店)による。
- (5) 『海国図誌』の韓国伝来と影響については李光麟の『韓国改化史研究』(一潮閣、一九六九、二)一八頁を参照すること。
- (6) 小林雅宏(一九八二)、明治初期の翻訳書からみた外国地名の表記(文研論集八、専修大学大学院)一四二頁を参照すること。
- (7) 韓国近代語の資料としての『西遊見聞』については、李漢燮(一九八五)の『西遊見聞』の漢字語について(国語学 一四一、国語学会)を参照すること。
- (8) これについては、李漢燮(一九八五)と任展慧(一九九四)の論文を参照すること。

照すること。

(9) 合衆国という単語の成立、および日本への伝来については、『斎藤毅の明治のことは東から西への架け橋』(講談社、一九七七)を参照すること。

参考文献

- 金泰俊(一九九七)、外国への憧憬と祖国への回帰——兪吉潁の『西遊見聞』、福沢諭吉の『西洋事情』との関連を中心に——、東京女子大学比較文化研究所紀要、五八、東京女子大学比較文化研究所、一九九七・一
- 成元慶(一九八三)、『西遊見聞』で漢訳された各国家名改、東方学誌 三六三七—三六八、延世大学国文学院
- 柳永益(一九九〇)、『西遊見聞』論、韓国史市民講座 第七輯、一潮閣
- 李光麟(一九七九)、兪吉潁の改化思想、韓国改化思想研究、一潮閣
- 李光麟(一九八五)、『西遊見聞』の漢字語について、国語学 一四一、国語学会(日本)、一九八五・六
- 任展慧(一九九四)、『日本における朝鮮人の文学と歴史』、法政大出版局、一九九四
- 鄭英淑(一九八八)、福沢諭吉と『西遊見聞』にみられる外国国家名の漢字表記について、古岩黄聖圭博士定年記念論文集、古岩黄聖圭博士定年記念論文集刊行委員会
- 宛字外来語辞典編輯委員会(一九七九)、宛字外来語辞典、柏書房、一九七九・一一
- 遠藤好英(一九八八)、外来語漢字一覧、漢字講座九 近代文学と漢字(佐藤晋代治編)、明治書院
- 小林雅宏(一九八二)、明治初期の翻訳書からみた外国地名の表記、文研論集八、専修大学大学院
- 佐伯哲夫(一九八六)、維新前後の新聞に見る外国地名の漢字表記、神戸大学国語年誌 六
- 西浦英之(一九七二)、幕末・明治初期の新聞に現れた外国名商標呼・表記について、皇学館大学紀要 九、皇学館大学、一九七二
- 水持邦雄(一九九〇)、明治初期における外国地名の漢字表記について、金沢大学国語学・文学研究 一九、金沢大学教育学部国語国文学会、一九九〇・七

——高麗大学教授——